

## 日本における「トリスタンとイズー」伝承群（二）

髪長姫，絵姿女房，イズー，そして玉鬘

梅 山 秀 幸

キーワード：トリスタンとイズー，髪長姫，道成寺，チョンダラー（京太郎），  
絵姿女房

### 【トリスタンとイズー】

恋愛という，心おだやかに日常生活を送っている人間にとっては物騒千万で，一種の異常な精神状態そのもの，そしてそれへの肯定と過度の称賛は他のどの社会にも生じることなく，中世ヨーロッパだけに特有なものなのであろうか。「トリスタンとイズー」の語る死に至る愛の神話の西洋社会における意味については，ドゥニ・ド・ルージュモンがその古典的ともいえる著作の中で詳しく論じている（Denis de Rougemont “L'AMOUR ET L'OCCIDENT” Librairie Plon 1956）。いってしまえば，しょうことのない不義密通であるが，ヨーロッパの中世人は制度への侵犯とそれによって生じる悲劇的な死に対して心の内奥に共感するものをもっていて，愛に殉じる死への幻想さえもが彼らを昂揚させたのであったろう。ただ，われわれも『源氏物語』の中のいくつかの「トリスタンとイズー」に匹敵する愛の物語をもっているし，何よりも本居宣長がこの物語は「もののあはれ」を描いていて，「もののあはれ」は男女の情愛の中に集約的に現われ，その中でも不義密通に極まるのだと，息のつまりそうな儒教社会のただ中で喝破してのけた。また近松門左衛門の世話物には，心中や妻敵打ちをあつかって身と心とをせめて悲劇的な死に至る男女の恋の物語がある。制度を侵犯する恋愛に対して寛容な文化を，あるい

は寛容過ぎる文化をもたなかったわけではなかった。しかし、今はそれを語る場ではないであろう。「髪長姫」のものがたりが「トリスタンとイズー」伝承の一つのヴァリエーションではないかというとき、どの部分の何をもってそういえるのか、その比較の基準を示す必要があろう。

「誰もがトリスタンの伝承は知っている、いや誰もがそれを知っていると信じている」と、今、筆者の手もとにあるLivre Pocheの『トリスタンとイズー フランス語の詩、ノールウェーのサガ』(“Tristan et Iseut Les poèmes français, La saga norroise ” Librairie Générale Française 1989)の序文でフィリップ・ウォーター氏は書いている。しかしながら、中世のヨーロッパを席卷したこの愛の物語に、その定本らしいものは実は存在しない。それは今なお生きていて、進化の過程にあり、さまざまな語りの形式で変容し続けているのだと、ウォルター氏はいう。中世フランスにおいてベールールやトマによって語られた、今残る最も早いフランス語のエピソードから、ワーグナーのオペラを通し、またジャン・コクトーの映画の傑作である『永劫帰郷』に至るまで、さまざまに形を変えてこの不幸な恋人たちの物語は語り継がれて来たのだ、と。

日本で手に入りやすいテキストとして、佐藤輝夫訳・ベディエ編の『トリスタンとイズー』(岩波文庫)がある。しかし、実際には、これは19世紀の終わりにジョゼフ・ベディエがrenouveléしたものである。つまり、ベディエが蓄積した学識と詩人としての才能を駆使して中世的な文体で再話したものだということになる。その間の事情をガストン・パリスが序文で説明をしている。

「もしこの伝説についての完全なフランス本が残されていたなら、それを現代の読者に知らせるとなれば、ベディエ君はその忠実な翻訳を与えることでこと足りたでしょう。けれども不思議な運命のまわりあわせで、それが散りぢりの断片をもってしか伝えられていない以上は、ただたんなる訳者であるというよりももっと積極的な役割をとらざるをえなくなり、しかもその役割を果たすためには、たんに学者であるだけでは不十分で、その上に詩人で

あることが必要だったのです」

12世紀半ばにしきりに語られた「トリスタンとイゾー」の物語があって、それをトマがまとめたものと、ベルールがまとめたものがあるのだが、その両者ともフランス語で完全な形で現在に伝わっているわけではなく、残っているのは一部といってよいものである。ただトマのものをアイルハルト・フォン・オベルグがドイツ語に翻訳したものがあり、これはまとめた形のもので残っていて、これに従えば簡単なのだが、しかし、トマのものではアングロ＝フランスの騎士的社會の精神と作品に完全に同化させられてしまい、伝説の未開の要素が消えてしまう弊害がある。そこで、ベディエはベルールの作品の復元を目指すことになったというのだが、ゴッドフリート・フォン・シュトラスプールの断簡や残存していた小詩などをも含めて参照しながら、鋭敏な詩的な言語感覚と想像力を駆使して出来上がったのがわれわれが手にするテキストだということになる。

われわれが基準にするのはこのベディエ再話の「トリスタンとイゾー」で十分なのだが、先に触れたLivre Pocheの“Tristan et Iseut”はベルールやトマの残簡、ベルンとオックスフォードの「狂えるトリスタン」(“Folie Tristan”), マリー・ド・フランスの「すいかずら」(“Lai du Chèvrefeuille”), そして無名氏の「愛のことば」(“Le Donnei des Amants”)などの断片が収められていて、最後にはほぼ完本のノルウエーのサガの『トリスタンとイゾー』が収められている。それらをもとに、この本の編者のフィリップ・ウォーターがまとめた「トリスタンとイゾー」の梗概を次にあげる。ベディエのものにない箇所もある。

マルク王の妹のブランシュフルールはルーノワの王と結婚する。夫の死を知って、彼女も死ぬが、トリスタンという名の子どもをこの世に残した。孤児のトリスタンはグーヴェルナルによって養育され、やがて舅<sup>おじ</sup>のマルク王の宮廷にやって来る。

アイルランド王の義兄弟である巨人のモルホルトがマルク王の宮廷にやっ

て来て、取り決めてあった貢物を要求する。その貢物とはコルヌアイユの名家の子もたちである。トリスタンはモルホルトと戦い、これを殺してしまう。モルホルトの遺体はアイルランドに運ばれたが、トリスタンの刀の破片がモルホルトの頭蓋骨に残っていた。トリスタンは癒されることのない傷を負い、漕ぎ手のない船に乗って海を漂流して、アイルランドの岸辺に至る。そこではトリスタンは吟遊詩人をよそおい、王の娘の金髪の美しいイズーに出会う。イズーは薬草の知識をもっていて、トリスタンの傷を治す。トリスタンは滞在する間、イズーにハーブの演奏を教え、マルク王の宮廷に帰っていく。

マルク王は独身であった。臣下たちは彼に結婚することを進める。おりしも燕が金色の髪の毛を加えて来て、マルク王はこの髪の毛の持ち主と結婚すると答える。トリスタンがその髪の毛の持ち主を連れて来る役目を負う。彼は彼女がアイルランドにいることを知っている。トリスタンは商人の格好をしてアイルランドに入りこむ。

アイルランドに行くと、アイルランド王は恐ろしい龍を退治した者に娘を与えると公言していた。トリスタンは龍を殺し、その舌を切り取ったが、自身も気絶した。イズーに思いをかける貴族の一人が死んでいる龍を発見して、自分が龍と戦って勝利したと主張する。イズーはそれを信じず、倒れているトリスタンを発見する。イズーはふたたびトリスタンを治す。トリスタンは嘘をつく貴族をやりこめ、イズーをマルク王のもとに連れていくことになる。イズーの母は、イズーについていくブランジアンに、結婚がうまくいくように秘薬をもたせる。その秘薬によって、マルク王とイズーとは抗うことのできぬ強い情熱によって結び付けられることになるはずであった。しかし、海を渡る途中、トリスタンとイズーはこの秘薬を飲んでしまい、抵抗することのできない愛に捉われてしまう。

マルク王はイズーと結婚したが、ブランジアンがイズーに代わって初夜の床に入った。トリスタンとイズーは互いに限らない情念に身を焦がす。彼らは忍び合いを重ねる。彼らは嫉妬深い臣下たちに見張られ、マルク王に密告

される。ある日、彼らは果樹園で密会しようとして、松の木に隠れていたマルク王に気づく。彼らは巧みにいい逃れをして、事態を切り抜ける。しかし、マルク王に仕える星占いをする小人が二人の明らかな密会の現場をおさえる罠をしかける。二人はとらえられ、マルク王によって火あぶりにされようとする。

トリスタンは捉われていたが逃げ出し、ハンセン氏病者の一団に身柄を引き渡されそうになっていたイズーを助ける。トリスタンとイズーはモロワの森に逃れて完全な融合を果たす。

次第に愛の秘薬の効力が衰えてくる。ある日、マルク王は森に入り込み、トリスタンとイズーが二人で眠っているのを見る。二人の間に抜き身の剣が突き刺してあるのを見て、二人が貞潔だと信じる。マルク王はイズーを潔白だとして戻ることを許そうとする。臣下たちは彼女を無実とするには、裁判にかける必要があると主張する。あいまいな宣誓のおかげで、イズーは巧みに罪を逃れることができた。トリスタンは邪悪な臣下たちを殺すが、しかし、彼自身は追放の身の上であり、望むようにはイズーに会うことができない。

追放の身の上であって、トリスタンは結婚をする。金髪のイズーに似た白い腕のイズーがその相手で、友人のカエルダンの妹だった。しかし、トリスタンは彼女とはいっしょに寝ることはなかった。

イズーとの恋の思い出は強く、トリスタンはいつもイズーのことを考えていた。二人はなんとか再会の機会を作ろうとする。トリスタンはマルク王の城に入り込むために狂者をよそおい、汚れた身なりをして、イズーに語りかけるが、イズーにはそれがトリスタンだとはわからない。二人だけにしかわからない思い出を語って、やっとイズーはトリスタンを認知するが、この逢瀬は束の間のものであった。

ある日、トリスタンは小人のトリスタンと名乗る不幸な騎士に出会う。その騎士の恋人は巨人に略奪されていた。トリスタンはその巨人とたたかい、毒をぬった槍に傷ついた。友人のカエルダンはトリスタンを治すことのできる唯一の人間であるイズーを連れて来るために海を渡った。二人に友人は取

り決めていた。もしイゾーを連れて来ることができれば、白い帆をはり、連れて来ることができなければ、黒い帆をはると。白い腕のイゾーはこれを立ち聞きしていた。裏切ったトリスタンに復讐するために、白い腕のイゾーは沖に見える船は黒い帆を上げていると、病のトリスタンに告げる。トリスタンは悲しみのあまりに死に、金髪のイゾーも恋人の胸にすがりながら死んだ。

「トリスタンとイゾー」に先行し、その成立に大きな影響を与えたと考えられる作品として、アイルランドの「ディアメイドとグレイヌ」、そして、ペルシアの「ウイスとラミン」が挙げられると、ウォーターは指摘している。これらの書物のそれぞれ英訳（“THE PURSUIT OF DIARMAID AND GRAINNE”）と仏訳（“LE ROMAN DE WÎS ET RÂMÎN”）が私の手もとにあるが、これらについては後に触れることにしよう。われわれは茫漠とした伝承の海の中をさ迷っているのであり、到底、この論考では直接的な影響関係を指摘するまでには至らないが、日本の伝承群の多くは12世紀の「トリスタンとイゾー」よりも古いものである。道成寺の「髪長姫」の伝承を、伝承が語る通りにそのまま8世紀に成立したということではできないにしろ、日本には明らかに「トリスタンとイゾー」以前の「トリスタンとイゾー」伝承がある。

### 【日向の髪長姫】

日本の古代にも髪長媛はいた。その髪長姫の物語はきわめて「トリスタンとイゾー」に似た構造をもった物語に思える。応神天皇の時代のことである。『古事記』・『日本書紀』のどちらにも見える話なのだが、まずは『古事記』を通して見ることにする。[以下、『古事記』の引用は『古事記大成・本文篇』（平凡社）を用い、『日本書紀』の引用は日本古典文学大系（岩波書店）を用いる]

天皇、日向の国の諸<sup>もろがた</sup>県<sup>の</sup>の君の女、名は髪長比売、其<sup>かた</sup>の顔容<sup>ちうるは</sup>麗美<sup>め</sup>しと聞し看

日本における「トリスタンとイズー」伝承群（二）

して、使ひたまはむとして喚<sup>め</sup>上げたまひし時、其の太子<sup>おほさざき</sup>大雀の命、其の嬢子<sup>をとめ</sup>の難波津に泊てたるを見て、其の姿容<sup>かたち</sup>の端正<sup>うるは</sup>しきに感<sup>め</sup>でて、即ち建内の宿祢<sup>あたら</sup>の大臣に詔<sup>の</sup>へて告りたまひけらく、「是の日向より喚<sup>め</sup>上げたまひし髪長比売は、天皇<sup>みもと</sup>の大御所に請ひ白して、吾に賜はしめよ」とのりたまひき。爾に建内の宿祢<sup>あたら</sup>の大臣 大命を請へば、天皇即ち髪長比売を其の御子に賜ひき。賜ひし状<sup>さま</sup>は、天皇 豊明 聞し看しし日に、髪長比売に大御酒<sup>かしは</sup>の柏を握らしめて、其の太子に賜ひき。爾に御歌曰みしたまひしく。

いざ子ども 野<sup>の</sup>蒜<sup>びる</sup>摘みに 蒜<sup>ひる</sup>摘みに 我が行く道の 香ぐはし 花橘は  
上<sup>ほつえ</sup>枝は 鳥居<sup>とりあ</sup>枯らし 下<sup>しづえ</sup>枝は 人取り枯らし 三つ葉の 中つ枝の ほ  
つもり 赤ら嬢子<sup>をとめ</sup>を いざささば 良らしな

とうたひたまひき。又御歌曰みしたまひしく、

水溜<sup>よきみ</sup> 依網<sup>あぐひ</sup>の池の 堰<sup>う</sup>杙<sup>う</sup>打ちが 刺しける知らに 蕁<sup>ぬなはく</sup>繚<sup>は</sup>り 延<sup>は</sup>へけく  
知らに 我が心しぞ いや愚<sup>をこ</sup>にして 今ぞ悔<sup>くや</sup>しき

とうたひたまひき。如此歌ひて賜ひき。故、其の嬢子<sup>うた</sup>を賜はりて後、太子歌曰ひたまひしく、

道の後<sup>しり</sup> 古波陀嬢子<sup>こ は た とめ</sup>を 雷<sup>かみ</sup>の如<sup>ごと</sup> 聞えしかども 相枕<sup>きこ</sup>枕<sup>あひまくらま</sup>く

とうたひたまひき。又歌<sup>うた</sup>曰ひたまひしく、

道の後<sup>しり</sup> 古波陀嬢子<sup>こ は た とめ</sup>は 争はず 寝<sup>ね</sup>しくをしぞも 愛<sup>うるは</sup>しみ思ふ

とうたひたまひき。

ここでは、歴史を追及するわけではないので、当時の大和朝廷と九州の日向との関わりについて触れる必要はないであろう。ただ、「結婚」が「征服」や「統合」としばしば同意義であることを念頭に置いておこう。つまり、服属の証として、その国のもろもろの有形・無形の宝ものが贈与される。あるいは、その贈与が強制される。その贈与されるものには国々の魂が籠められていると、古代の人びとは考えたであろう。女性こそ、その「国魂」の最たるものとなるにちがいない。たとえば、大国主命は、天孫族が高天原から下って来る前に、この豊葦原の中つ国を経営していた神とされる。またの名を

八千矛の神ともいい、名前からすれば、戦争神であったと思われるのだが、神話では戦への言及はまったくなく、語られるのは「妻まぎ」の話だけである。大国主命はたいへんな艶福家であって、在原業平や光源氏、あるいは好色一代男の世之助の先駆をなしているといつてよい。因幡の八上比売を娶ったことは因幡の国を併合したこと、越の国の沼河比売を娶ったことは越の国を併合したことを意味しよう。支配し、統合する、しかも多くは累々たる屍の上に成り立った荒々しくも血なまぐさい人間の営為を、「色好み」というやわらかな手触りの喩でかたっているのである。

道成寺の髪長姫の話にあり、「トリスタンとイズー」にもあった、鳥が髪の毛をくわえてきたという要素は、日向の髪長比売の物語では欠落する。大和の王が日向の首長の娘である髪の長い美しい女性の存在を知って、それを手に入れたいと考えた。日向の支配権を女性とともに手に入れようとしたことになるが、難波の港に着いた髪長比売の美しさを見染めた息子が父親にこれをねだって、父親は気前よく息子に譲ったということになる。王家のさまざまな権利はいずれ息子に継承されるのだから、前もって女性を譲ることなど、大して問題ではないはずである。だがもちろん、フロイトをもちだすまでもなく、父と息子の問題はそう簡単には運ばない。マルク王は息子のように可愛い甥に対してもイズーへの優先権を簡単には手放さなかったから、三角関係はこじれにこじれてしまい、至高の愛の物語が紡がれることになる。日本の父親は、それとくらべれば、寛容なのであろうか。父と子の世代の対立は極点までいくことはなく、あいまいに解消されてしまう。応神天皇は息子の朱雀の命にいと簡単に髪長比売を譲ってしまうのである。『源氏物語』においても、桐壺帝は寵愛する藤壺と息子の光が密通するのを見て見ぬふりをしたふしがある。光が逆の立場になって、息子ではなかったが、自分の妻と密通した息子の世代の柏木を、彼が自分の妻に産ませた赤子を抱きながら、やはり許した。ただ、マルク王も死んでいった二人の恋人を最後の最後には祝福することになるのだが。

『古事記』は中世的な罪の意識とも苦悩とも無縁である。「三つ栗の 中つ



枝の ほつもり 赤ら嬢子」という表現は美しい処女の古代的な初々しい表現であるが、年配者の父は同世代者の息子がこれに恋をするのも当然として、王者としての分別ある判断を見せる。宴会で酒に酔って、髪長比売自身に息子に酒を進めさせながら、若い者同士よろしくやりなさいということになる。もちろん、息子にしてやられた多少の口惜しさはあるのであろう、「堰杵打ちが 刺しける知らに 蕁繰り 延へけく知らに」と、息子が手を伸ばしていることを知らないでいて、「我が心しぞ いや愚にして 今ぞ悔しき」と自嘲して見せるのは、愛嬌といってよく、古代的な大らかさがただよっている。

父親がそのような配慮をしてくれることを知らず、恋心に悶々としていた若者は喜びの絶頂にある。遥かに遠い異国にあっても、その美しさはうるさいほどに噂されて、天下に鳴り響いていた、その女をものにしたのである。それを父親と争うこともなく、手に入れ、そして二人で床をとものにすることができた。『日本書記』には、「得交（まぐはひ）することねんごろなり」と書いている。トリスタンとイズーもまた「得交」しなかったわけではない。それはしかし、あくまでも秘められたものであり、イズーが結婚するのはあくまでもマルク王とであり、トリスタンとイズーは引き裂かれ、かつ決して引き裂かれることはない。コルヌイユでも婚姻の宴は、応神天皇の宮廷と同じように行われたのだが、それについてはほとんど語られることがない。初夜をどうごまかすか、自分の身代りにマルク王のベッドに入った忠実な侍女のブランジアンをどう謀殺しようとしたかに、物語の重点は置かれることになる。主人公たちは恋ゆえに殺人という大罪ですらいともやすやすと犯そうとするのだが、読者はそれを非難はせず、ただ恋の情熱の物語を堪能する。

いずれにしろ、遠い異国の髪髪の毛の美しい女性が求められ、海を渡ってやって来て、それが父と子、舅と甥とのちがいはあるが、異世代の肉親の間で争われる。物語の主要なモチーフは、日向の髪長比売のものがたりと「トリスタンとイズー」において一致するといつてよい（日本ではオジの漢字の使用が混乱している。母方のオジには舅を用い、父方のオジには伯父・叔父・仲父・季父をここでは用いることにする）。

『日本書記』でも、話は同じように進行することになるのだが、ただ一書を追加して、日向の髪長比売の大和への「興入れ」にまつわる奇妙な伝説も記録しておいてくれた。

一に云はく、日向の諸県君牛<sup>もろがたのきみうし みかど</sup>、朝廷に仕へて、年既に耆耆<sup>お</sup>いて仕ふること能はず。仍りて致仕<sup>まかりさ</sup>りて本土に還る。則ち己が女髪長媛<sup>もとづくに まが たてまつ</sup>を貢上る。始めて播磨に至る。時に天皇、淡路島に幸して、遊獵<sup>いでる</sup>したまふ。是に、天皇、西を望<sup>みそなは</sup>すに、数十の麋鹿<sup>とをあまり おほしか</sup>、海に浮きて来れり。便ち播磨の鹿子水門<sup>かこのみなと</sup>に入りぬ。天皇、左右に誦りて曰はく、「其、何なる麋鹿ぞ。巨海に泛びて多に来る」とのたまふ。爰に左右共に視て奇びて、則ち使を遣して察しむ。使者至りて見るに、皆人なり。唯角著ける鹿の皮を以て、衣服とせらくのみ。問ひて曰はく、「誰人ぞ」といふ。対<sup>こ</sup>へて曰さく、「諸県君牛<sup>もろがたのきみうし</sup>、是年耆<sup>お</sup>いて、致仕<sup>まかりさ</sup>ると雖も、朝を忘ることを得ず。故に、己が女髪長媛<sup>もとづくに まが たてまつ</sup>を以て貢上る」とまうす。天皇、悦びて、即ち喚して御船に従へまつらしむ。是を以て、時人<sup>ときの人</sup>、其の岸に著きし処<sup>なづ</sup>を号けて、鹿子水門と曰ふ。凡そ水手<sup>みなと</sup>を鹿子と曰ふこと、蓋し始めて是の時に起れりといふ。

加古という地名は鹿子に由来するという地名説話であり、また水手を「かこ」という語源についても語る。民間語源説話を鵜呑みにする必要も、まともに取り上げて否定する必要もないが、「嫁入り」の風俗として興味深い。フランスの洞窟壁画には、鹿や牛の毛皮をかぶって、半獣半人の姿をして立ちあがり踊り狂っている像があるが、これらも人びと日常の姿ではないだろう。祭祀儀礼の際の特別な服装だと思われる。結婚は日向の大和への服属を意味するとはいえ、行装をはなやかにととのえ、盛大にもよおすことによって日向の諸県の勢威を示威しなくてはならない。それも、みずからの伝統を捨て去るようなことはせずに、誇りをもって角のついたままの鹿の毛皮を衣服として、人々は船を漕ぎながら、髪長比売を送ったのである。「贈与」はマルセル・モースのいうように、神話や舞踊や歌謡や風俗をも含む全体的なもので

あるべきであって、「国魂」の興入れのために特別の「晴れ」のよそおいでもって船を漕いできたということになる。

実は、牽強付会は憤まなければならないと思いつつも、髪長比売の父を「牛」といい、水手たちが鹿の皮を着ていたと語られることから、ずっと気になっていることがある。イズーの故郷ではなく、嫁ぎ先の方になるが、マルク王の宮廷はCornouailleにあった。英語ではCornwallと表記することになるが、このCornはケルト語に起源をもつことばであるらしい。「角」を意味することばであり、突き出た場所、半島を意味することになる。

さらにつけくわえれば、私は十年ほど前、フランスの先史時代の遺跡を一カ月ほど歩き回ったことがある。ラスコーやニオー、タウタベル、ドルドーニュの渓谷、メルヴェイユの山上など。その中には、もちろん、あの有名なブルターニュのカルナックの巨石の列柱も含まれる。フランスのブルターニュ地方は、もちろんグラン・ブルターニュ＝グレート・ブリテンと民族的にも文化的に縁戚関係にある。カルナックでは数メートルの巨石が十列ほど、西から東に向けて延々と数キロの長さ に並べて立ててあるアリーニュマン（列柱）を見ることができる。ケルト族以前の遺跡らしいが、何の必要があって、このような仕事 がなされたのか。夏至や冬至、あるいは春秋のお彼岸と関係している、天体の運行と関係しているのだろうかというような説は昔からある。あるいは妖精たちの住みか（妖精たちはどうやら今もそこに住んでいるらしいのだ）、墓、あるいは宇宙（異界）への飛行場、戦車への防御、ローマの兵士たちのテントのための支柱、などなど、納得のいく説明はついに得られないのだが、いくつかの伝承の中に、次のようなものがあった。すなわち、

「聖コルネリが異教徒の兵士たちに追いかけて逃げ、海岸まで追いつめられた。船を見つけることも出来ず、もう捕まるしかなかった。そこで、自己の聖なる呪力を用いて、兵士たちを石に変えてしまった。それが今に残る列石なのだ」

というのである。ここで、「異教徒の兵士」というのは、カエサル率いるローマの兵士たちということになる。

聖コルネイユ（Corneille）はブルターニュでは聖コルネリ（Cornely）となる。聖コルネリはブルターニュの守護聖人であり、カルナックの中心にはその名前を冠した教会もある。このCornelyという名前にはやはりcorn（角）ということばが入っていて、聖コルネリは牛とか山羊とか角のある動物の守護者であると考えられていた。ブルターニュ地方で九月に行われるパルドン祭というのは有名だが、カルナックでは聖コルネリにかかわって、パルドン祭が盛大に行われるという。九月のその日、かつてカルナックでは善男善女が伝統的な民族衣装の晴れ着を着こんで、自分の家の家畜たちをぞろぞろと引き連れて行列行進をして、聖コルネリに感謝をささげた。動物たちの鳴き声が聞こえてのどこかでもあり、騒々しくもあったろうが、20世紀の初めころまでは、そうした光景が繰り返されたのである。

九州から瀬戸内海の船による輿入れは、角のついた鹿の皮を着込んだ人びとが船を漕ぐ人の目を引く異様なものであったが、アイルランドからコルヌアイユ（角の土地）に向かう船の甲板は、また別の意味で決定的な場面になる。のどの渇いたトリスタンとイズーは葡萄酒を飲んでしまうのである。「いやいや、それは葡萄酒ではない」と、ベディエはいう。また、「それは情熱だ、激しい喜悦だ、無限の苦痛だ、そして、それは死だった」とも。愛の秘薬を誤って飲んでしまって錯乱し、酔い痴れたように互いを求め合う二人の姿と絶唱はワーグナーのオペラの中でも感動的である。しかし、「愛の秘薬ゆえに」というのは口実に過ぎない。酒の上でのまちがいというのが言い分けにもならないように、二人は恋すべく運命づけられ、そして恋に落ちたということに過ぎない。

イズーのその後は、恋の官能と苦悶との起伏の大きいものであったが、日向の髪長比売はどうなったろうか。古代の天皇は、大國主命の行跡を継いで艷福家であったから、数多くの妃をもった。髪長比売をめめたく譲り受けた仁徳天皇（大雀の命）の場合もその例に漏れることはないが、この天皇の後宮が独自に見えるのは、後の石之比売いはのひめがたいへんな焼もち焼きだったことである。大和の豪族であり、朝鮮半島でも活躍した痕跡のある葛城曾都毘古かつらぎのそつびこの

娘である石之日売を、天皇は制御することができなかった。石之比売の嫉妬を恐れて、他の女性たちは宮廷に入ることすらできなかったと、『古事記』・『日本書紀』は語る。天皇と他の女性の仲が噂になれば、石之比売はそれだけで「足もあがか」にして、つまり地団太を踏んで嫉妬の炎を燃やした。そこで、たとえば、吉備の海部の直の娘である黒日売は召し上げられたものの、石之日売の嫉妬を恐れて故郷に逃げ帰ってしまう。高殿から沖を逃げ帰っていく船を見て、天皇が別れの悲しみを歌う。その歌を聞いて、石之日売は黒日売を船から引きずりおろし、徒歩で帰せたという。

あるいは、石之日売が宴会のための柏の葉を紀伊の国に採りに出かけようとしている隙に、仁徳天皇は八田若郎女とねんごろになってしまった。それを知って、石之日売は大阪湾から淀川に入り、さらに木津川をさかのぼって南山城の筒木まで家出をしてしまう。仁徳天皇がその機嫌をなおしてもらうのに、四苦八苦している様子が描かれている。中国の史書に描かれる呂后や則天武后などのライヴアルの女性たちへ加えた残虐のエピソードとくらべるとき、日本では残忍さも薄められユーモラスに描かれているのだが、女性の嫉妬という形で描かれる背後には、深刻な国々の対立と血なまぐさい戦乱があったのかも知れない。

日向の髪長比売が石之日売にどのような目に遭ったか、黒日売や八田若郎女の場合のように被害は記されていない。黒日売の場合は、もちろん子どもがいなかったし、八田若郎女の場合も、古代のソロレート婚の慣習で同じく仁徳天皇と結婚した庶妹の宇遅能若郎女とともに、「此之二柱、無御子也」とあって、子どもが生れなかった。石之日売の妨害にあったのだから、当然といえば当然の、納得のいく結果であったが、髪長比売はめでたく子どもをもうけることができた。

「又上に云へる日向の諸<sup>うしもろ</sup>の君、牛<sup>は</sup>諸<sup>た</sup>の女、髪長比売を娶して、生みませる御子、波多毘能大郎子。亦の名は大日下王。次に波多毘能若郎女。亦の名は長日比売の命。亦の名は若日下部<sup>わかくさかべ</sup>の命」

すなわち、大日下王と若日下部の命（以後、若日下王と表記する）の兄と

妹である。

破滅的な恋を選んだイズーは子どもを産むこともなかったから、子どもをもうけることもできた髪長比売は幸いだったといわねばならない。だが、この子どもたちはどのような一生を送ったのか、もう少したどってみよう。

### 【押木の玉鬘】

髪長比売の子どもたちのものがたりは『古事記』と『日本書紀』では微妙に違ってくる。まずは『古事記』でたどってみよう。仁徳天皇の時代が終わり、伊邪本和気の命（履中）・水齒別の命（反正）・雄浅津間若子の宿祢の命（允恭）と、仁徳の三人の息子たちが天皇位を継いで、続いて、允恭の子の穴穂の命（安康）の時代の話となる。穴穂の命は弟の大長谷の命（後の雄略）をオバに当たる波多毘能郎女＝若日下王と結婚させようとする。

天皇、伊呂弟大長谷の王子の為に、坂本の臣等の祖、根の臣を、大日下の王の許に遣して、詔らしめたまひしく、「汝命の妹、若日下の王を、大長谷の王子に婚はせむと欲ふ。故、貢るべし」とのらしめたまひき。爾に大日下の王、四たび拝みて白しけらく、「若し如此の大命も有らむと疑ひつ。故、外に出さずて置きつ。是れ恐し。大命の随に奉進らむ」とまをしき。然れども言以ちて白す事、其れ礼無しと思ひて、即ち其の妹の礼物と為て、押木の玉 纒を持たしめて貢進りき。根の臣、即ち其の礼物の玉纒を盗み取りて、大日下の王を讒して曰ひしく、「大日下の王は、勅命を受けずて曰りたまひつらく、『己が妹や、等し族の下席に為らむ』とのりたまひて、横刀の手上を取りて、怒りましつ」といひき。故、天皇大く怒りまして、大日下の王を殺して、其の王の嫡妻、長田の大郎女を取り持ち来て、皇后と為たまひき。

穴穂の命は弟の大長谷王のために大日下王の妹の若日下王と結婚させようとした。しかし、その仲介に立った根の臣が、大日下王が「礼物」として差し出した「押木の玉鬘」があまりに素晴らしかったので欲を出して隠匿し、

穴穂の命には大日下王は拒否したと伝えたために悲劇が起こる。大日下王の一族には美しい髪飾りが伝えられていたというのだが、父系の大王家ではなく、母系の日向の髪長比売から伝わったものだと考えてよいのではなかろうか。髪長比売は美しい髪をさらに引き立てる髪飾りをもっていたのである。「玉鬘」というのは、『源氏物語』のヒロインの名前であり、「海人の子なれば」とか細い声でいった夕顔の、それこそ九州で育った娘であった。このことについては、後に考えるとして、この「押木の玉縵」について、本居宣長の『古事記伝』は次のように綿密な考証をしている。

押木之玉縵は、書紀に押木玉縵一云立縵<sup>タチカヅラ</sup>、又云磐木縵<sup>イハキ カヅラ</sup>とあり、押木としても名けたるは、いかなる由か知りがたけれど、嘗試に云ば大神宮式正殿御飾金物の中に妻塞<sup>ツマフタギノ</sup> 押木打鋪十二口【径各一寸五分云々】とあり、されば押木と云物ありて、其形に造りたるにやあらむ、書紀に立縵ともあるを思ふに、其ノ押木のさまに造りたる茎に玉を貫て立たるにや。磐木縵と云も其状の巖<sup>イハホ</sup>の立たる如く見ゆるを以て云か、【木とは其茎を云べし、】貞觀儀式元日ノ礼服ノ制に、親王四品以上冠八青漆地金装云々 以白玉八顆立櫛形上<sup>ニ</sup>以紺玉二十顆立<sup>ニ</sup>前後押鬘上<sup>ニ</sup>と見え、【又玉を以て立<sup>ニ</sup>前押鬘上<sup>ニ</sup>とも立<sup>ニ</sup>後押鬘上<sup>ニ</sup>とも見ゆ、】また立玉者有<sup>ニ</sup>茎并座居玉者有<sup>ニ</sup>座無<sup>ニ</sup>茎と見えたり、【礼服の制は、大かた唐国のをまねび賜へる物なれども、右の玉かざりのさまなどは皇国の上代の縵の制を用ひられたる物と聞えたり、】是に押鬘<sup>オシカヅラ</sup>とある物、押木と同じきか異なるか、なほよく尋ぬべし、さて玉を立ツとあるは、茎をつけて立たる物なること、右の立玉者云々とある以て知ルべし、大かた此れらを以て、押木ノ玉縵の形状おしはかるべきか、【儀式に、押鬘と云名あるを以て思へば、押木も同じことにや、立玉に就て木とは云るか、然らばかの大神宮式の押木とは別ことなり、さて押と云フ由は<sup>オシ</sup>庄<sup>オシ</sup>にて、かの立玉の茎を<sup>テ</sup>立<sup>ス</sup>る料の物を居<sup>ス</sup>て、頭上<sup>オ</sup>を<sup>ス</sup>すよしの名にやあらむ、】・ ・ ・

平安時代の礼制を挙げて、唐国のものをまねたものではなく、皇国の上代

の縵の制が残存していたものと、本居宣長はいうのだが、たとえば新羅の古墳から出土するような壮麗な金冠に近いものを想像することも許されるのではあるまいか。あるいは、本居宣長の頬を逆撫するようなことをあえていえば、日本にも壮麗なティアラがあるのを、しばしば目にすることがある。仏像の宝冠である。たとえば、歓心寺の如意輪観音の宝冠、東大寺の法華堂の本尊である不空羂索観音の宝冠など、儀軌を逸するかに思われるほど絢爛として豪華である。この押木の玉鬘が欲しいばかりに、根の臣は安康天皇に虚偽を報告して、大日下王は殺されてしまう。そして妹の若日下部の命は大長谷王のものとなり、また大日下王の妻であった長田女郎も安康天皇のものになってしまう。この長田女郎にはすでに大日下王との間に眉輪王がいて、床の下で遊んでいた七歳の眉輪王が安康天皇と母親の睦言から、自分の父の死の真相を知って、天皇の首を掻き切って逃走するという事件が起こる。七歳の幼児が天皇を弑逆するという前代未聞の事件が発生して、そして、眉輪王は大長谷王に攻められて死んでしまう。野溝七生子の『眉輪』という小説はこの王子の悲劇を語って、古代を扱った歴史小説では、横光利一も三島由紀夫もはるかにしのぐ出来栄である。ところが、この夫を殺され、その殺した相手の妻になり、新しい夫を實の息子に殺されるという、凄惨な運命を負った長田女郎の系譜に問題がある。

『古事記』を読むと、允恭天皇記には、次のようにある。

此の天皇、意富本杼<sup>おほほど</sup>の王の妹、忍坂<sup>おさか</sup>の大中津比売の命を娶して、生みませる御子、木梨之輕<sup>きなしのかる</sup>の王。次に長田の女郎。次に境の黒日子<sup>さかひ</sup>の王。次に穴穗<sup>あなほ</sup>の命。次に輕<sup>かる</sup>の女郎。亦の名は衣通<sup>そとほし</sup>の郎女。(御名を衣通王と負はせる所以は、其の身の光、衣より通り出づればなり)次に八瓜<sup>やつり</sup>の白日子<sup>おほ</sup>の王。次に大長谷<sup>はつせ</sup>の命。次に橘<sup>さかみ</sup>の女郎。次に酒見<sup>さかみ</sup>の郎女。(九柱)凡そ天皇の御子等、九の柱なり。(男王五。女王四)

允恭天皇は忍坂の大中津比売との間だけにしか子どもをつくらなかったが、



それだけでも男子五人、女子四人の計九人に上ったことになる。そして、ここの記述を信じるならば、穴穂（安康）と長田大郎女とは同母の弟と姉だということになる。大日下王に嫁いでいた姉を、その夫を殺した上で奪ったのである。しかし、この結婚はタブーのはずである。まさしくこの系譜の中で、木梨之輕の王と輕の大郎女とが通じたために破滅したことが語られている。それは歌謡を通して語られる悲劇的なオペラといってよいものだが、その討伐に向かったのも穴穂王子に他ならない。その当事者である穴穂王子がやはり姉妹の長田大郎女と結婚したというのには、無理があると、多くの日本人の学者は考える。だから、ここは『古事記』の誤りであるとされるか、長田大郎女は同名の別人であると結論づけられて、素通りされてしまうのだが、しかし、チェンバレンの英訳の『古事記』をなんらの先入見なく読んでのことであろうが、クロード・レヴィー＝ストロースは『親族の基本構造』において、まさにこの部分に焦点を当て、まったく別の結論を導きだしているのである。

### 【レヴィ＝ストロース】

昨晩、前節までを書き終えて、今朝（11月4日）、レヴィ＝ストロースの訃報に接した。学生時代に彼の『悲しき熱帯』・『野生の思考』などを読んで感銘を受け、1977年には京都を訪れた彼の講演会を聴くことができ、またその後も何度か、ごく近く彼の訾咳に接することのできる機会もあったのだが、つつい自分のフランス語の会話力のなさから臆して、一步前に進んで質問するという勇気をもたなかった。当時、私は彼の『親族の基本構造』をフランス語で丹念に読み進めながら、『和名抄』の親族語彙を分析しつつ、『古事記』や『日本書紀』、そして『大鏡』や『栄華物語』の中の結婚の一幕をカードにとり、日本の上代のイトコ婚について論文を書いていた。それが日の目を見たのはしばらく後のことであったが（「上代の結婚について」『創造の世界』46号 1983年5月 小学館）、レヴィ＝ストロース自身、後の著作を見れば、同時期、『源氏物語』や『大鏡』を精力的に読んで、日本の文化について

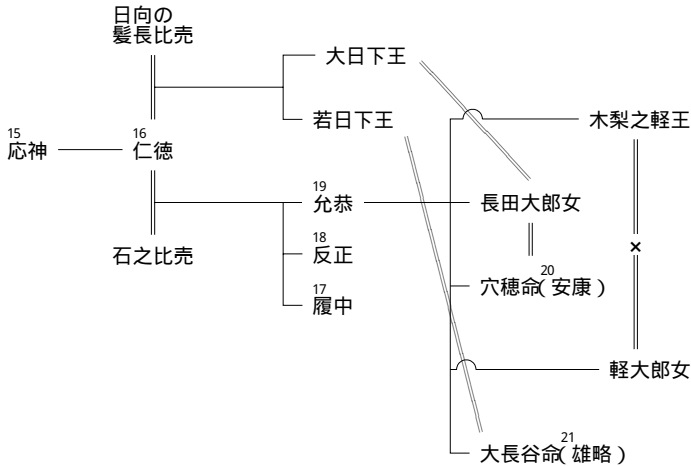
深く思索をめぐらしていたはずなのである（『はるかなる視線 1, 2』みすず書房）。三度ほど、挨拶だけは交わす機会を持ちながら、何も実のある話をできないで済んでしまった。2007年から2008年にかけて、彼が過ごしたパリのカーディナル・ルモワンにあるコレージュ・ド・フランスに研究室を与えられ、彼が旺盛に研究活動をしていたころのままにしてあるというものの、主人不在のレヴィ＝ストロース研究室の窓を中庭越しに毎日見ながら過ごすことができた。来るのが二十年は遅れてしまったと思いつつ。今ごろ、あの研究室には三色スミレの花束が手向けられているに違いない。

さて、『親族の基本構造』の中で、日本の古代の結婚について、日本人の学者たちがまったく見落としてしまっていた、驚くべきレヴィ＝ストロースの指摘を次に掲げることにする。微妙な部分があるので、30年前を思い出しつつ、原文をまず掲げることにする。

Notre éminent collègue M. Ralph Linton nous faisait remarquer un jour que dans la généalogie d'une famille noble de Samoa, étudiée par lui, sur huit mariages consécutifs entre frère et soeur, un seul mettait en cause une soeur cadette, et que l'opinion indigène l'avait condamné comme immoral. Le mariage entre un frère et sa soeur aînée apparaît donc comme une concession au droit d'aînesse ; et il n'exclut pas la prohibition de l'incest puisque, en plus de la mère et de la fille, la soeur cadette reste un conjoint interdit, ou tout au moins désapprouvé. Or, un des rares textes que nous possédions sur l'organisation sociale de l'ancienne Égypte suggère une interprétation analogique ; il s'agit du Papyrus de Boulaq n°5, qui relate l'histoire d'une fille de roi qui veut épouser son frère aîné. Et sa mère remarque : Si je n'ai pas d'enfants après ces deux enfants .là, n'est-ce pas la loi de les marier l'un à l'autre ? . Ici aussi, il semble s'agir d'une formule de prohibition autorisant le mariage avec la soeur aînée, mais le réprouvant avec la cadette. On verra plus loin que des anciens textes ja-

ponais décrivent l'inceste comme une union avec la soeur cadette, à l'exclusion de l'aînée, élargissant ainsi la champ de notre interprétation. Même dans ces cas, qu'on pourrait être tenté de considérer comme des limites, la règle d'universalité n'est pas moins apparente que le caractère normatif de l'institution.

[ ある日、われわれのすぐれた同僚のラルフ・リントンが教えてくれた。かれの研究によると、サモアのある貴族の家系において、兄弟と姉妹の間のうち続いた八例の結婚のうちで、一例だけは妹（soeur cadette）との場合がふくまれていた。原住民の意見はそれを反道徳的だと非難していたという。それゆえ、兄弟と長姉（soeur aînée）との結婚は、長子権（droit d'aînesse）の譲渡とみなされていて、近親婚の禁止とは抵触しない。というのは、母や娘に加えて、妹（soeur cadette 次女以下）も禁止された配偶相手、あるいは好ましくない相手となっているからである。ところで、古代エジプトの社会組織についてわれわれがもつ貴重なテキストの一つは、おなじような解釈を示唆している。そのテキストとは、自身の長兄（frère aîné）と結婚しようとしたある王女の物語を記載しているブーラクパピルス第五である。彼女の母はそこで「もしわたしが、この二人の子供のあとに子供をもたなければ、この二人を結婚させるのが法ではないのか」といっている。ここでも、長姉との結婚は許し、次女との結婚は排除する禁止の型が関係しているように思われる。あとで見るように、日本の『古事記』は、近親婚を、次女との結合のこととして記述し、長姉を除外しているが、これもわれわれの解釈の領域をひろげさせてくれる。ギリギリの場合として考察されてよいこれらの場合においてさえ、普遍性の規則が、制度の規範的性格があるのとまさるとも劣らず明瞭に、存在しているのである。]



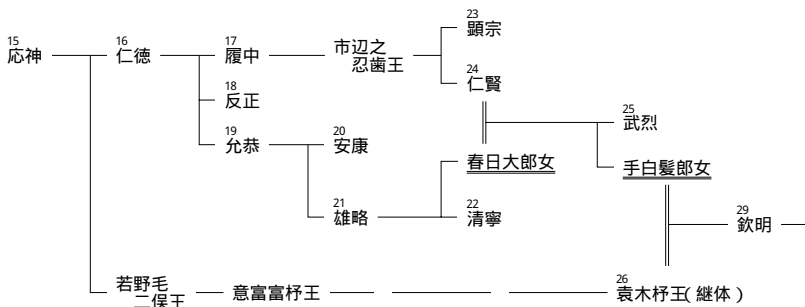
近親婚へのタブーや抑制は当然どの社会にも存在するものであるが、王家には近親婚に傾く傾向が見えるのは特異なことではない。レヴィ＝ストロースはエジプトの王家とともに、日本の王家の近親結婚のあり方にも「長子権 (le droit d'aînesse)」の存在を想定している。なるほど、『古事記』だけを読んで論を組み立てるならば、長女の長田大郎女との近親婚はよく、次女の輕大郎女との近親婚がタブーであるのは、むしろ積極的に長子権の存在を前提とせざるをえないことになる。あるいは、ここでは長姉権と言い換えた方が実状に合うかもしれない。日本人学者は『古事記』に戸惑ったが、戸惑う必要はまったくなく、記述は実に明瞭なのである。姉との結婚はいいが、妹との結婚はだめだということなのである。柳田国男は『妹の力』を書いたが、この本の題名は誤解を招きやすい。というよりも、いやすでに多くの誤解を生じさせているのではあるまいか。この「妹(いも)」は年少者を意味しない。一家の靈力を担う女子であって、実際には長姉である場合が多いと考えられる。それが兄弟たちを守ってくれるわけだが、沖縄の『をもら』には糸けり(兄弟)に対するをなり(姉妹)が登場し、アイヌの『ユーカラ』ではボンヤ・ウンペに対するイレス・サボが登場する。どちらも一家の靈力を身に付けた重要な女性である。大王家にもそれがいて、極めて特殊なケースとはいえ、

## 日本における「トリスタンとイズー」伝承群（二）

男の王子は王としての靈威を身につけるためにその姉と結婚をせざるをえなくなる場合があると考えられる。継承権の正統性がゆらいで不安定な場合に、それは多く行われるだろうし、また王朝交代が行われる際にも、新しい王は前王朝の長姉と結婚することによって、その王家の魂を身に着けることが行われる。たとえば、武烈天皇には子がなく、ここで王家の系譜はいったん途切れるかに見える。新たに北陸からやってきた、応神天皇の五世の孫を標榜する袁本杼命（継体）が天皇の位に着くことになる。それについて、『古事記』は次のように書いている。

「天皇既に崩りまして、日継知らすべき王無かりき。故、品太の天皇の五世の孫、袁本杼命を近つ淡海の国より上り坐さしめて、手白髪<sup>テシロカミ</sup>の命に合わせて、天の下を授け奉りき」

つまり仁賢天皇の娘と結婚することにより、継体天皇は王位の保証を得るのであり、仁賢天皇自身も、実は若いころはシンデレラのように灰まみれになって地方を放浪していたのだが（これも日本におけるシンデレラ・サイクルの一つである）、自分にとっては父親を殺した敵である雄略天皇の娘である春日大郎女と結婚することによって王権を手に入れているのである。このような例はほかにも多く挙げることができる。



On peut comparer avec le japonais *imo* qui designe tantôt la soeur et tantôt l'épouse. Peut-on affirmer, avec Barton et Chamberlain, que cette ambivalence de certains termes archaïques atteste l'ancien existence de

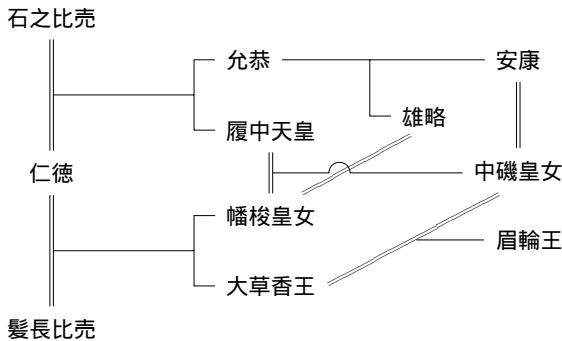
marriages consaguins ? L'hypothèses n'apparaît pas invraisemblable quand on remarque, comme nous l'avons fait plus haut, que les anciens texts japonais, en limitant la définition de l'inceste à une union avec la soeur cadette, semblant légitimer, comme l'Égypte et comme Samoa, le mariage avec l'aînée. La préférence pour le mariage avec la cousine matrilatérale chez les Batak et dans l'autres régions d'Indonésie, les indices en faveur de l'existence ancienne du même système au Japon, suggèrent une autre interprétation, qui n'exclut d'ailleurs pas la précédente ; les femmes de la même génération que le sujet, bien que confondues sous la même désignation, seraient distingués, selon le point de vue auquel on se place, en conjoints possibles et en conjoints prohibés.

[これは日本語のイモが，あるときは姉妹を，あるときは妻を指すのにくらべられよう。古代のいくつか言葉のこのような相反的意味は，古代に血族結婚が存在したことを立証するものであると，パートナーやチェンパレンとともに断言することができるだろうか？われわれがすでに指摘したように，日本の古代のテキストではインセストの定義を次女以下との結合に限定し，長姉との結婚は，エジプトやサモアと同様に正当なものと認めているらしいので，この仮説は，ある程度あたっているように思われる。バタク族やインドネシアの他の地域における母方イトコとの婚姻の優先，および日本において古代に同様の傾向が存在したという証拠は，なお以前の解釈を排除するものではないが，別の解釈を暗示する。同じ呼び方で混同されているとはいえ，自己と同世代の女たちは，設定される視点によって配偶者になりうる者と禁じられている者とに分けられよう。]

今まで日本の学者の何人もがなしえなかった指摘であって，検討すべき重要な内容を含んでいる。だが，西洋の学問の動向にも目配りがあって，決して偏狭な国文学研究者ではなかった西郷信綱氏は，残念ながら，レヴィ＝ストロースを読みこなせなかったのだと思われる。どう間違っているという指

摘もないままに、「なお、このチェンバレンをもとにしてレヴィ＝ストロースは『親族の基本構造』で日本のことに言及しているが、その部分は受けいれるわけにはゆかない」（『古事記研究』未来社）といわずもがなの一言を書き加えて、みずからの著書の価値を貶めている。

しかしながら、『日本書記』の編者たちも、すでにわれわれのもつ偏見をもにしている、レヴィ＝ストロースのように考えることができなかったの  
 だろうか。中国のモラルに影響されて、しかも中国人にも読めるような漢文  
 での史書であるのだから、『古事記』の記述のままではまずいと考えたのであ  
 る。『日本書記』の記述はすこし違っている。まず履中天皇紀に、「次妃はた幡  
 梭皇女、中磯皇女を生れませり」とあって、履中天皇が異母姉妹の幡梭皇女  
 と結婚したことになる。履中天皇には正妃の黒媛がいたが、黒媛は天  
 皇が淡路島に狩に出かけていたとき、神の祟りがあって変死をしてしまう。  
 その後、髪長比売の娘の幡梭皇女が履中天皇の皇后になったというのである。  
 そうして、履中天皇と幡梭皇女との間に生まれた中磯皇女が舅に当たる大草  
 香皇子と結婚したことになる。そうすると、安康天皇は履中天皇が死  
 んで未亡人となった幡梭皇女を大長谷皇子のために要求したことになり、そ  
 れを拒んだ大草香皇子を殺して、そのために未亡人となった中磯皇女と安康  
 天皇自身が結婚したことになる。大草香皇子と中磯皇女との間の息子の眉輪王  
 が新しい父親の安康天皇を殺害する。



### 【女性の髪の毛】

柳田国男の『桃太郎の誕生』の中に「髪長姫」と題した小文がある。ただ、その大枠は「絵姿女房」を論じるものであって、その最後に「髪長姫」をあつかう一節をもうけているのである。「絵姿女房」にはどこか外からの新しい影響があるようであるが、広く日本全国に伝わる「絵姿女房」の昔話の原型を探っていけば、殿さまが女の美しい絵姿を見て手に入れようとしたという形の話の前の形は、美しい髪の毛をきっかけにその持ち主を手に入れようとしたというものであったろうという形で論を進めている。絵という媒介がかなり新しいものであり、また絵に描かれた女性にうつつを抜かすほどに写実的な美人画が描かれるのは、ごくごく新しい時代であろうから、確かに絵以前のものが問題となる。

しかし、この説明は間違っているかもしれない。女性の美しさなど、実は多くは想像力の問題ではあるまいか。むしろ、現実がそのまま目の前に現れるよりも、ほのかに暗示さえされればいいのである。女性の肌に触れた衣類や装飾品、フェティッシュが一つあれば十分であり、美しい髪の毛一筋があるだけで、男たちは気もそぞろになるはずなのである。平安時代の男たちは簾や屏風や几帳の奥の高貴な女たちの姿など碌に見ることもできなかった（ということになっている）から、美しいという噂さえ立てば、その女性はえもいわれぬ美しい女性だったのである。そうして、垣根越しにでも優雅な琴の音さえすれば、それで男はいともたやすく恋に落ちる。そうでない男もいるかもしれないが、それはもののあわれを解さない人間であって、あまり価値のない人間である。歌をやって、みやびやかであわれな返歌が返ってくる、いや逆にすげなくされる、それで、さらに恋心は募っていく。それは本質的に現在でも変わらない、恋愛の真実であって、判断すべき材料が目の前にすべて提供されていて、十分すぎる悪材料があっても、何も見ようとしない場合がある。目を塞ぐのである。恋愛は想像力によって刺激される。遠く異国に離れていても、美しいという噂だけがあれば、恋をするには十分だったの



である。

いずれにしろ、「絵姿女房」の古い形として「髪長姫」に行きあたるということになる。柳田の説話の採集の重点は、むしろ「絵姿女房」の方にあるのだが、それでも、たとえば、菅江真澄の『筆のまにまに』巻四からの引用として、紀州淡島の加太神社の神主阪本左膳の伝える、兄海土<sup>け あま</sup>の出の髪の美しい女性で、やはり鳥がくわえていった髪の毛から見出されて天武天皇の妃となった女性の話を載せている。同じ和歌山県の話であるから、道成寺の髪長姫から派生したものではないかと思われる。そして遠く離れて、柳田国男は東北の閉伊郡に伝わる話を佐々木喜善の『聴耳草紙』から引用している。

某といふ家の娘が三月三日の潮干に行ったまゝ、三年の間帰つて来なかつた。三年目のちやうど同じ日に、身もちになつて戻つて来て、やがて一人の女の子を生み落したが、其の子の父の誰であるかは言はなかつた。女の子は生れながら髪長く、やがて十七八の美しい娘になる頃には、其長さが七尋と三尺もあつた。都では時の御門が、春の日に右近の桜といふ名木の花を御覧になつて居ると、其木の枝に珍しく長い髪の毛が三筋引掛つて居た。安部晴行といふ博士、是は人間の髪の毛に相違無しと占つたので、然らば其の女を探し出せといふことで、乃ち猿楽といふ者を仕立てて、京から西東へ手を分けて尋ね求めさせる。東の国々を廻つて居た猿楽の一組は、行き行きて閉伊郡山田の湊のほとり、小山田といふ里にさしかかつて、或峠の上で猿楽を興行し、土地の女たちを招いて見物させると、其見物の数多い群の中に、七尋三尺の髪の毛の娘が、その長い毛を桐の箱に入れて背に負ひ、母と共にまじつて居た。それを見つけて猿楽は直ぐに止め、娘は都へ連れて行かれた。土地ではこの女性を今も「うんなん神」と祀り、都の人が猿楽を舞つた処を、永く猿楽峠と呼ぶことになつたといふ。（『定本柳田国男集第八巻』筑摩書房 1969年）

また逆に南に行つて、沖縄諸島に伝わる浦島説話では、長い髪の毛を説く

ものが多いとして、柳田はさらに二、三の話を紹介している。

たとへば遺老説伝に宮古島の祢間<sup>ね ま</sup>の伊嘉利、天川崎の浜辺に出て水際に三筋の髪毛の漂ふを見る。長さ七八尺許、奇として之を収むれば忽ち一美女来りて曰ふ。吾昨夕此地に遊び一髪を失へり。拾ひたらば之を返せと。乃ち返し与ふれば海中に帰り去る。翌日同じ所に行きて又美女に逢ひ、龍宮に連れ行かれて留まること三日、家に還つて見ると既に三年であつた。その折に鼓<sup>つん</sup>練<sup>ねえら</sup>の古曲を始め、尚色々の神祭の行法を教へられて来たと言つてゐる。(同)

この場合は龍宮の女、海神の娘であるが、柳田の論で重要なのは、こうした長い髪を持ち主である女性というのは巫女ではなかったかという議論である。『古事記』の海神の娘たちも豊玉姫、玉依姫といって、玉＝霊という巫女らしい名前をもっていた。東北の閉伊郡の話の場合も、後に「うんなん神」として祀られたという唐突な結末から、巫女性が暗示されよう。母 娘と継承される巫女の家系であり、「其の子の父の誰であるかは言はなかつた」とある通り、父親など問題にならなかつたのである。髪長姫にもまして、イザーは母親から継承して薬草の知識にきわめて詳しく、二度もトリスタンの不治の病を治したという。母親は物語の鍵となる媚薬までも薬草から作った。日本でいう「巫女」というしかない存在であり、後にキリスト教が「魔女」として追いつめ、火あぶりにかけるような類の女性であつたように思われる。もちろん、柳田はイザーを論じているわけではない。だが、鳥が髪を毛を運ぶような女性は尋常の人ならぬ能力をもった女性なのだと考える視点は、神がかりをするような女性たちを魔女として火あぶりにして抹殺してしまったヨーロッパの学者たちが忘れがちな、というよりも、まったく欠落している視点ではないだろうか。イザーは恋愛のヒロインである以前に巫女であつて、霊的な存在であるはずなのである。そして、さらに進んで、トリスタンの傷を治すのは、あくまでも薬草によってでなくてはならないのであろうか。坂から落とされて来た焼いた大石によって殺された大国主の命は、トリスタン

がイズーによって癒されたように、女性たちによって癒される。<sup>きさがひ</sup>蜆貝比売と<sup>うむぎ</sup>蛤貝比売がやってきて、蜆貝比売（赤貝）がみずからを削って粉にして、蛤の汁に溶かして、母乳のように傷口に塗って治したというのであった。貝＝女性器という発想を強調するのもはばかれるが、イズーの母親が調合した媚薬というのも、薬草を用いたものでなければならなかったかどうか。母親がイズーとそしてマルク王のために作った媚薬というのも、薬草を煎じてできたものであったのかどうか。

こんなことを考えるのも、柳田国男の髪長姫に関するエッセーの落とし所は、さらに興味をそそられるものだからである。女性のうるわしく男の心をとらえた髪<sup>そそげ</sup>の毛というのは、はたして、頭に生える髪<sup>そそげ</sup>の毛であつたろうかと、柳田は疑問を投げかける。いってしまえば身も蓋もないが、それは、むしろ、女性の「揃毛」だったのではないかというのである。「七難の揃毛」、つまりさまざまな災難から守ってくれる女性の陰毛がうやうやしく蔵されている寺社が各地にあるとして、柳田はその例を挙げている。箱根権現にあり、琵琶湖の竹生島にあり、信州戸隠には色紅黒く縮みて長さ五六尺の鬼女紅葉のものがあ<sup>り</sup>、それぞれ宝物として蔵されている。あるいは、興福寺には光明皇后の髪があり、吉野の天川には白拍子静のものがあ<sup>り</sup>、また七難の陰毛がある、などなど。これらはあらゆる災難から私たちを守ってくれる、途方もない効力をもった護符であつたことになる。

## 【貨幣論】

「七難の揃毛」にかかわって、少し逸脱をしてみたい。逸脱することによって、自分が論じようとしていることの枠組みを把握できると思うからである。経済学者がおそらくはマルクスを引き、マックス・ウェーバーを引いて、難解な議論を繰り返しているであろう「貨幣」について考えてみたい。岩井克人氏の『貨幣論』（筑摩書房 1993年）は、電子マネーすら登場し始めた時代のこの問題の地平を示してくれているのであ<sup>ら</sup>うが、それよりやや古い栗本慎一郎氏の『経済人類学』（東洋経済新報社 1979年）は議論の進め方は荒

っぱいものの、貨幣の本質と起源について考える手がかりを示してくれている。そこでは、貨幣の起源とは何であったか、たとえばフロイトの「性格と肛門愛」(『フロイト著作集第5巻』人文書院)を引いて、貨幣とは糞便なのだという議論が紹介されている。吝嗇＝便秘，消費＝排便という構図は理解できなくもないし、江戸時代の浮世絵に「世なおし」を主題にしたものがあり、それは高利貸らしい人物が自分の肛門から小判をざくざくと便として排出しているものである。貨幣＝糞便という議論はある程度は納得できる。栗本氏はさらにミルチャ・エリアーデの「貝殻のシンボリズムについての考察」(『イメージとシンボル エリアーデ著作集4』せりか書房)を援用する。エリアーデの論というのは、次のようなものである。

水の起源と牡蠣および鹹水の貝殻に結びつく月のシンボリズムはさることながら、なんといってもその女陰との類似という点がいちばんそれらの呪力に対する信憑を掻き立てる元となったことだろう。そのうえ、その類似がときとして双殻軟体動物を指す言葉そのものの中に記されている場合がある。牡蠣を指すデンマークの古称クーデフィスク(kudefisk)[kude=vulve 女陰]がその証拠である。貝殻と女性性器の重ね合わせは日本でも等しく認められている。貝殻と牡蠣はこんな風にして子宮の呪術的な力を分有するのである。汲めども尽きぬ泉のように女性原理のしるしならどんなしるしからも迸り出る創造力がそれらの中にたち現われ、力を振るっているのである。だからして、お守り、あるいは装身具として肌につけられた牡蠣、貝殻、真珠は女性に受胎を容易ならしめるあるエネルギーを沁み込ませるばかりでなく、厄災もたらず諸力から女性を保護するのである。

女性の性器のシンボルである貝殻が中国では貨幣の起源となる。われわれが使う経済にかかわる漢字の多くが、「買」「賣」「貿」「貯」「販」「資」「貸」「貪」「貧」「費」など、「貝」を部首にもつのは、そのことと無縁ではないし、現在の五円玉、五十円玉に至るまで、日本で穴のあいた貨幣が存在している

のも、その名残りが根強く残っているからである。「宝」の旧字は「寶」であって、文字通り、貝だったわけだが、柳田国男の「寶貝のこと」という一文は、あるいはミルチャ・エリアーデよりも深い議論をしているように思われる。

寶貝に禁呪厭勝の力ありと信じ始めたのには、必ず別に一般的な心理が働いたのであるが、さういふ中でも特に安産の守りとして、之を重んずるやうになつた頃には、恐らくはもうあの貝の珍しい形に、専ら注意を向けるやうになつて居たであらう。燕の子安貝といふ言葉などは日本では相応に古く、あの小鳥が遠い常世の国から、貝を嘴にくはへて飛んで来ることがあるといふ言ひ伝へが、我邦にもあつたことは察せられるが、それがどんな形をした貝であつたやら、是だけはまだ明らかになつたとは言へない。しかし竹取物語のあの個条が、やゝ下品な諧謔を目的とし、子安といふ言葉には別にちがつた内容がありさうにも無いのだから、やはり今日と同じ様な連想と俗信とが、もうあの頃からあつたものと見てよいのであらう。畔田翠山の古名録に依れば、ソソ貝だのべべ貝だのといふ名が、既に室町期の医書類には用ゐられて居り、俗間にはそれよりももつと悪い異名が、今日は流行してゐるかも想像せられる。しかしさういふ多くのものは、寧ろこの貝の人を助ける力を忘れてしまひ、たゞ形の珍しさだけに、心を引かれるやうな連中の思ひつきであつて、その一つ以前の素朴なる人たちが、まのあたり天然の不可思議に驚き、是に隠れたる靈の作用を認めやうとした場合とは、仮に幽かな記憶の繋がりはあるにしても、命名の態度はまるでちがつて居た。即ち一方は稀にしか之を口にせず、又は少なくとも戯笑の具には供しなかつた。（『海上の道』『定本柳田国男集第一巻』所収 筑摩書房 1968年）

日本の南海で採れる子安貝がどういうわけか中国において珍重されて、それが原初的な貨幣となつたのだが、それには禁呪厭勝の力があつたからであると考えられる。その靈的な力がどこから発生するかと言えば、それは女性

器に似ていて、安産、あるいは豊穡への祈り以上のものを、人々はそこに見出していたからである。その「珍しい形」と、柳田はまことに巧みな表現をしているのだが、そこに人びとは神秘を感じたとして、実はこの貝の開口部は鋸歯状になっていることにも注意すべきなのであろうか。vagin denté（歯のついたワギナ）といえば、また特別な女性の類型を表すことになる。それはえもいわれず美しく離れ難い女性をいうのか、食らいついて離れない世にも恐ろしい女性をいうのか、あるいはその両方を兼ね備えた女性をいうのか、いずれにしる、子安貝の禁呪厭勝の力はその鋸歯の部分も重要な役割を果たしているのだと思われる。『竹取物語』の中で、かぐや姫は求婚者の一人である阿部御主人に「燕の子安貝」を持ってくるようにいった。阿部御主人は宮廷の大炊殿の軒にある燕の巢に手を入れ何ものかをつかんで落下する。見ると、それは燕の糞に過ぎなかったという落ちになっていて、貨幣のフロイト理論とエリアーデ理論が交錯する仕儀になっているのだが、さらに注目すべきなのは、燕は巢の中にイズーの髪の毛を運び、髪長姫の髪の毛を運ぶだけでなく、もっとも女性的なものの象徴である子安貝をも運んで来ることになっていて、それが貴重な「寶」だと、平安時代の人びとに信じられていたことである。かぐや姫はそれにしても人が悪い。

その子安貝によって決済される。日本では「お金をはらふ」というのだが、また「罪をはらふ」ともいう。物をやり取りすることによって、その場に生じる気まずさ。それを罪とも穢れとも古代の日本人は感じたことになるが、それを「はらふ」ことによって、取引のなかった以前の状態にもどすことができる考えたことになる。宗教的な「祓い」と経済的な「払い」とは同源のことばである。そして、その「はらひ」には女性器を象徴する貝が有効だったということになるのである。

その心理を説明してくれる昔話がある。「鬼が笑う」という昔話である。今は亡き河合隼雄氏の「日本の民話 笑いの深層」(『創造の世界』27号 1978年8月 小学館)から、引用してみる。新潟県南蒲原郡に伝わるという話であるが、河合氏の再話ということになる。氏が旺盛に活躍を始めたころ

の口調をしのぶことにしよう。

ある旦那のところに愛しげなる一人娘がおったんですが、これが嫁入りすることになりましてかごに乗って行きますと、不意に空から真っ黒な雲が下りてきて、娘を包んでいってしまう。それで母親はたいせつな娘をとられたので困って、自分の娘を捜しに出かける。そして小さなお堂のところへ行きますと、庵女さんが出てきたのです。庵女さんというのは尼さんじゃないかと思いますが、庵女さんは、おまえの捜している娘は川向うの鬼屋敷にさらわれている。川にはおお犬こま犬が張り番をしているが、犬の寝ているあいだにうまく行ったらいいという。あといろいろこまかいことがあります、この庵女さんの助けによりまして母親はうまく川向こうへ渡るわけです。

そうしますと、シャン、シャン、シャンカラリンと娘が機を織っている。母親は喜んで娘に抱きつく。そこで娘は母親に御飯を食べさせ、石のお櫃に隠しておくわけです。そうすると、そこへ鬼が帰ってきます。鬼は、どうも人間くさいといいだす。庭に不思議な花がありまして、家のなかにいる人間の数だけ花が咲くようになっている。それが三つ咲いておりますので、鬼はひじょうに怒って、おまえだれか一人隠しているだろうというわけです。そうしますと娘は、自分は身持ちになったんだと嘘をつくわけです。すると鬼はやたら喜んで、逆立ちせんばかりで、大声をだして家来どもを呼び集めて、そして酒だ、太鼓だ、おお犬こま犬を叩き殺せというわけで大騒ぎになりまして、番をしている犬までみんなで叩き殺すわけです。こういうところはやけに楽しい鬼ですが、ともかく鬼は酔って寝込んでしまう。そこで娘はお母さんといっしょに逃げだす。川を渡って逃げていますと、鬼が追いかけてくる。追いかけてもなかなか追いつかないので、鬼は家来に川の水を飲みほしてしまえという。それで大ぜいの鬼どもが水を飲みますので、川の水が逆流する。船は鬼の口の辺までいくわけです。そこへ例の庵女さんがパッと現れまして、母と娘におまえさんたちぐずぐずせんで早うだいじなところを鬼に見せてやりなされというんですね。そこで庵女さんもいっしょになって三人

が着物の裾をまくりあげました。それを見て鬼どもはゲラゲラと笑うわ、笑うわ、転げまわって笑って、その拍子に飲み込んだ水をすっかり吐きだしてしまいました、というんです。

アマテラスの岩戸隠れの際、アメノウズメノミコトが裸で踊り、集まった神々の笑い声に誘われてアマテラスは出て来るのであった。女性の性器の露出と笑いというのは、日本神話の中核に位置していることになる。河合氏はここでは「鬼が笑う」ということに重心をおいて論じられているのだが、女性器は恐ろしげな鬼ですら笑い、その場の緊張を無化させ、迫りくる危機を一瞬のうちに回避させてしまう力をもつことになる。フランスの洞窟の中にも女性器を彫ったものが散在していて、人類最初の造形芸術はvulveなのだと、ものの本も解説している。それは今でも駅のトイレの落書きに散見するものだし、人間の唾棄すべき最も野卑な関心事を示すと切って捨ててもいいものだが、逆に、人間のもっとも根源的なエロス、死に対する生の象徴と言い変えてもいいものなのであろう。貨幣の起源というのも、女性器のそうした非常な力の中に秘められていることになるであらう。日本の寺社でうやうやしく蔵されているという「ソソ毛」というのもその力にあやかっただけのことができる。

### 【絵姿女房】

髪の毛から絵姿に。絵画が誕生して、絵姿に男たちは恋をするようになる。「絵姿女房」の話は日本中にあるようだが、たとえば、柳田国男が冒頭に挙げる、黒川能の起こりを説く話を引用してみよう。

昔々、黒川村の孫在家といふ処に、孫三郎といふ一人の百姓があつた。或時川端に出て見ると、上から瓜が流れて来た。それを拾つて来て神棚に上げ、後で食べようと思つて楽しみにして居ると、不意に赤児の啼声がするので、驚いて神棚を見たところが、めごえ女の児が生れて居た。其子を大事に大事



に、ふつつつと言つて育てたら、忽ち大きくなつて美しいお姫様になつた。孫三郎はお姫様が余りに美しいので、毎日其姿をながめて居るばかりで、少しも働かぬ様になつてしまつた。それではならぬと姫は自分の姿を絵にかいて、それを何処へでも持つて行つて働くことにさせた。或日其絵を畠の傍に引掛けて置いて、それを見ながら仕事をして居たところが、不意に大風が吹いて空高く之を巻上げ、何処へ行つたか見えなくなつてしまつた。御城の殿様の庭の高い松の樹の枝に、何やら風のやうなものが空から舞つて来て引掛かつて居る。殿様があれは何かと取下して見られると、世にも稀なる美人の姿絵であつた。此様な美しい上臈がどこに居るのであらうかと、段々家来に尋ねさせて見ると、それは孫在家の賤しい百姓の女房であつた。早速呼寄せて無理に奥方にしてしまふ。孫三郎は諸処方々と姿絵を捜しまはつて、手を空しくして還つて来れば、当の本人のお姫様はもう居ない。どうぞしてもう一目でもよいから逢ひたいと思つて、毎日御城の門まで往つて見るが、門番が叱り飛ばして入れてくれなかつた。そこで色々と思案した上で、姫が大好きであつた栗を売りに行つて見ようと思ひ、栗売に姿をかへ、<sup>たらのぎやま</sup>梳代山の柴栗々と大きな声でふれながら、御城のまはりを三度まはつて見た。一方御姫様の方では、無理に連れて来られて奥方になつたが、まだ一度でも笑ひ顔を見せたことが無かつた。それが此日ちやうど御城の窓の下を、大声で栗を売つてあるく男の姿を見て、始めてたつた一度につこり笑つた。それで殿さまが大急ぎに栗売を喚入させ、何と男、その栗は皆買つて遣るが、其代りにこちらの言ふこともきくかとある。何かと思ふと殿は自分の衣服を脱いで、取換へて孫三郎のきたない着物を着て、柴栗の袋を背に負ひ、門を出て御城の窓の下を、何度も何度も栗々とふれてあるいた。さうして今一度姫の笑顔を見たいと思つて居るうちに、日が暮れて城の門は閉され、匱の栗売はもう還ろうと思つても、門番が入れてくれない。匱の殿様の孫三郎は、出ようと思つても門が堅く閉されて居た為に、とうとう殿様となつて御殿の中にとまつてしまつた。併しいつ迄も爰には居りたくないの、翌日は姫を伴ひ色々な宝物を持つて、黒川の村へ帰つて来た。黒川明神の御宝物の能の面を始と

し、金の茶釜や金銀細工の道具類は、何れも此折に御城から持出したもので、孫三郎はそれから明神の社家となり、又能楽の座頭となつて、子孫は明治の初まで、連綿として続いて居た（国分剛二君報、大正三年採集）

この説話群のヒロインはこの世のものとも思えない美しさをそなえていなくてはならない。そこで、もともと尋常ならざる出自の女性であることが多いのである。この話では瓜から生れたことになっている。他には、たとえば、天の羽衣伝説と合体して、天女であったという場合もある。殿様は絵姿に描かれた女房を求めることになって、難なく絵の女房を手に入れる。その美しさを愛するあまりに仕事も手に着かないほどであったのに、その女房が連れ去られたお城の周りを回りながら、「柴栗々々」と叫ぶ孫三郎。そしてお城に連れて来られて鬱々と楽しまない女房の二人の姿には、城を出されたものの、しかし城を離れることのできないトリスタン、そして、城の中でトリスタンを思い浮かべながら楽しめないイズーの二人の姿が重なるであろう。またトリスタンとイズーがマルク王をだましつつ逢瀬を続けるように、孫三郎と女房も殿さまをだましおせる。こちらは殿さまを城外に追い出し、ふたたび一緒になるのである。この「絵姿女房」はトリスタンとイズーの伝承のサイクルに含まれ、日本の封建社会の土俗的な環境で変異していることになる。

そして、ここで注意しておきたいのは、先の東北の開伊郡の髪長姫の話では猿楽の集団とかかわり、宮古島の祢間の伊嘉利は龍宮から鼓練の古曲を伝えてきたといい、以下に列挙する「絵姿女房」の説話群も、ほとんどが芸能者集団の起源を語る説話になることである。ここの孫三郎は黒川能の創始者である。そして、いうまでもなく、トリスタンは楽人であった。ヴァイオリンをもち、ハーブを奏でるトリスタンの絵が多く残る。トリスタンは騎士であり、戦士であり、そして恋する男であったが、その物語を伝える吟遊詩人たちがトリスタンと同一化したのであったろう。「トリスタンは豎琴をとって歌った。その歌声を聞きながら、騎士たちはみな、しみじみと心にしみわた

る思いがした」とあり、「王の心が悲しい時には、豎琴を弾いて、その憂さをはらすのだった」とある。ひとり瀕死の体を横たえて船で流されたときにも豎琴をはなさず弾き続けていたのだった。

### 【烏帽子折】

柳田国男はさらに各地の「絵姿女房」のヴァリエントを提供している。岩手県の紫波郡の昔話、豊前築上郡のエンブの話、肥前の南高来郡の話、福島県の「安積山の糠次郎」、周防室津半島の般若寺の般若姫の話などなど。そして、舞の本の『烏帽子折』について触れることになる。『烏帽子折』は、鞍馬寺から抜け出た牛若丸が金売り吉次にともなわれて奥州に下る途中、鏡の宿で烏帽子折を尋ねてみずから烏帽子を注文して元服し、さらに街道を下っていき、盗賊の熊坂長範を退治するというのが話のあらましである。牛若丸はみずから元服名を源九郎義経と名乗ったが、吉次は京藤太と名付ける。京藤太は青墓の宿で君の長に所望されて笛を吹くが、そのとき、君の長は「草刈笛」の由来を語る。その草刈笛の由来話がというのがやはり「絵姿女房」なのである。ここでもトリスタンの豎琴よろしく、笛という芸能が出て来ることに着目しておこう。『烏帽子折』の挿話としての「絵姿女房」のあらましは次のようなものである。

用明天皇は十六歳になるまで后がいなかった。そこで、公卿たちが六十六本の扇に美しい女性の絵姿を描かせ、日本の六十六ヶ国にこの扇の絵に似た女性を見つけ出して宮廷に上げるように命じた。しかし、誰ひとり絵に似た女性はいなかった。

豊後の国の内山に長者がいて、聖観音に祈願して女子を得て、玉よの姫と名付けて大切に育てたが、それが成長してみると、扇の絵そのままの美しさであった。この姫のことが天皇の耳に達して、天皇は早速に都に召し上げようとした。

内山の長者は大事の娘を手放せない。すると、天皇は芥子の種一万石を差

し出せと命じる。長者は難なくこれを調達して献上する。今度は、天皇は蜀江の錦で両界の曼荼羅を「二十色に七流」織って差し出せと命じるが、これもまた内山の聖観音の協力を得て献上する。

玉よの姫をあきらめきれない用明天皇はついに天皇の位を捨てて豊後に下り、山路と名を変え内山の長者に牛飼いとして奉公することになる。

牛飼いの本分の草刈りも満足にできない山路が笛を吹くと、牛さえもが草を食むことも忘れ、角を傾け、舌を垂れて、聴き惚れた。

都では天皇がいなくなって困り果て、占ったところ、宇佐八幡で放生会を行い、すべてに神事は内山の長者に差配させればよいと出た。

内山の長者のもとですべての神事の用意万端を怠ることなく行うが、ただ一つ流鏑馬の執行についてはわからない。山路はすべてを知っていて、山路の指示通りに用意をして、八月十五日の当日、近国の大名小名などが見物する中、山路は色よい装束を着て鹿毛の馬に乗って、矢を射るとすべてが的に命中する。すると、神殿が振動して、八幡神が現れてかしこまり、山路に天皇として還御するように、おさとしするのである。

山路（用明）はこうして、玉よの姫を手に入れることができた。玉よは懐妊して、生まれたのが聖徳太子となる。

この『烏帽子折』そのものが「牛若丸」のものがたりであり、挿入される説話もまた、「牛飼い」の話になる。この論考では、なぜか、牛から離れられないようなのだ。恐らく、牛の飼育の世界的な伝播と説話の伝播とが密接にかかわって何か意味があるらしく思うのだが、その意味はまだ茫漠としていてつかみかねている。南方熊楠の『十二支考』を参考にしたいと思って開いてみると、他の十一支については実に詳しく考証しているのに、驚いたことに、丑については項目さえ欠落しているのに気が付いた。あの本は実は『十一支考』に過ぎない。南方は他のところで牛頭天王などに言及しているのだが、推測されるのは、丑の項目はあまりに資料が膨大になるために、完成するのに他日を期したのではあるまいか。

それはともあれ、ここでは、ある美人を描いた絵ではなく、逆に美人絵が先立って、その絵に似た現実の女性が捜されることになる。ここでは他の説話のように二人の男で女性が争われることにはならない。というのも、一人の男が二人の男の役割を兼ねてしまうからである。用明天皇は、天皇の位を捨てて、海を越えて九州まで下る。つまり、用明天皇はマルク王の役割を捨ててトリスタンの役割を担って九州まで行き、トリスタンが難題を解決しつつイズーを（マルク王のために）手に入れるように、玉よの姫を手に入れる。そして、玉よの姫を手に入れるやいなや、天皇に復位して、トリスタンからマルク王の役割に立ち戻り、都に帰って行くことになるのである。「玉よ」というのは「<sup>たまより</sup>玉依」の「り」が欠落した名だと思われる。

ここでは、牛若丸その人は「京藤太」と名乗らされている。「藤太」からは、「依藤太」が思い浮かべられ、さらには炭焼きの、そしてその炭を使った冶金業の存在を考えるというのは、柳田国男の示した道筋であった（「炭焼き小五郎が事」『定本柳田国男集第一巻』所収）。金売り吉次の随行者が名乗る名前として藤太はふさわしい。だが、この京藤太が物語の中でしたことといえば草刈笛を吹いたことであって、芸人として振舞っていることになる。『烏帽子折』の中で冶金業を問題とするならば、むしろその挿話である「絵姿女房」の真野の長者の生業を考える場合においてである。なぜ豊後の長者として全国で名をとどろかすことができたのか、その背後に冶金業の存在を問題にする必要があるであろう。しかし、一つの産業からもろもろの産業が派生することなのであろうか。山路は牛飼いをしながら草刈り笛を吹いて過ごすことになっていて、真野長者は牧場経営も行ったことになる。しかも、ただそれだけではない。どうやら、真野の長者は冶金業を中心にして一大複合企業体を形成するようなのである。

近松門左衛門の『用明天皇職人鑑』は『烏帽子折』のこの挿話を発展させた、やはり用明天皇と真野の長者の娘との恋の物語であり、この二人から生れた聖徳太子が職人たちを率いて、日本古来の神々を信じる排仏派との宗教戦争に勝利するという、愉快的な活劇が舞台で繰り広げられることになる。玉

よの姫は継母との折り合いが悪く、九州から出てきて都住まいをしていて、花人親王（後の用明天皇）を宴席に招待して、自分のところで勤めている多くの職人たちに官位受領をさせようとする。真野の長者の娘が擁していた職人たち、鏡屋、鍛冶屋、塗師、御簾屋、扇屋、具足屋、弓屋、木地屋、指しもの屋、檜物屋、桶屋、などなど。はなはだ不思議な話であり、興味深いのだが、今は取り上げれば、問題を複雑にしまって、手に負えそうもない。「絵姿女房」の絵の要素を欠いているので、今は触れないことにしよう。

ただ、『烏帽子折』にしる、『用明天皇職人鑑』にしる、用明天皇と真野の長者の娘の玉よの姫との結婚から生れたのが聖徳太子であるというところは、聞き流しておけばいいことなのだろうか。正史では聖徳太子は用明天皇と穴穂部間人皇女の間にも生まれたことになっている。穴穂部間人皇女は九州の長者の娘ではありえない、とはまずは思う。穴穂部間人皇女は、どうしても天皇の娘でなくてはならないが、その命名からみて、穴穂部の女性を乳母として育てられたと考えられる。あるいは泥部穴穂部皇女とも書かれるところを見ると、泥部とも関わりがあったとも考えられるから、九州の豪族とまったくかわりがなかったとは断言できない。また、京都府の北、日本海に面して、「間人」と書いて、「たいざ」と読ませる土地がある。穴穂部間人皇女がある時期、そこに難を避けて滞在して、また「退座」したからだと伝承されている。「滞座」と考えてもいいと思うのだが、なぜか退いた方に力点を置いて言い伝えられている。聖徳太子は、この母親が死ぬと、その後を追うようにして、妻の一人の膳部郎女とともに死んだことになっている。母親の死を追って、夫婦でともに後を追って自殺したかのような言い伝えがある。聖徳太子の母の穴穂部間人皇女ははなはだ謎めいた女性であるようである。「間人」というのが神と人の間にいて神意を人に告げる巫女性を意味するとすれば、間人皇女と玉よ(り)姫は同じ意味をもつ名前である。

「烏帽子折」の玉よの姫は穴穂部間人皇女であるというには無理があるにしても、用明天皇には彷徨の青年時代があったのかもしれない。『日本書紀』敏達天皇七年にちょっと気になる記事がある。

「七年の春三月の戊辰の朔壬申に、菟道皇女を以て、伊勢の祠に侍らしむ。即ち池辺皇子に奸されぬ。事顕れて解けぬ」

この池辺皇子こそ用明天皇に他ならない。伊勢までわざわざ下って、触れてはならない伊勢の斎宮を犯したのである。在原業平の先駆けともなるような色好みの人物だということになる。業平が伊勢の斎宮とかかわり、また東下りをするように、池辺皇子にも美人を遠国まで求め歩く気質は十分に認められそうである。また、律令制以後であれば、斎宮を犯した故での、九州への左遷および流罪という可能性も考えられなくもないのだが、伝承を真剣にあげつらうのは、この程度にしておこう。

用明天皇といえば、思い出されるのは法隆寺の金堂の薬師仏であり、その光背銘である。

「池辺大宮治天下天皇、大御身勞つき賜へる時、歳は丙午に次れる年に、大王天皇と太子とを召して誓願ひ賜へらく、我が大御病、太平らがなむと欲ほします。故、寺を造り、薬師像を作り仕へ奉らむとすと詔りたまひき。然れども当時崩り賜ひて造り堪へたまはざりき。小治田大宮治天下大王天皇また東宮聖王、大命受賜ひて、歳は丁卯に次れる年に仕へ奉る。」

現存する薬師仏は、この光背銘のいう丁卯の年（607）に造られたものではないというのが、現在の学会の趨勢であって、すると『日本書紀』の紀年とも齟齬のある光背銘についても疑義が生じるのだが、ここにある文章と『日本書紀』を突き合わせて理解すれば、用明天皇は敏達天皇の後を受けて即位したが、まもなく丙午の年（586）には天然痘にかかったらしい。そのために国家として仏教を受け入れるかどうか、崇仏派と排仏派の対立のある中、用明天皇は崇仏の方に舵を切ることになる。新しい仏の力でみずからの病の平癒と蔓延する疫病の鎮静を祈ろうとして、仏像を造り、寺を立てることを誓ったものの、用明天皇はあえなく死んでしまった。そのまもなく、物部守屋を筆頭とする排仏派と聖徳太子と蘇我馬子を中心とする崇仏派とのあいだの宗教戦争があって、崇仏派の勝利に帰した。その後、ゆくりなく、推古天皇の時代に、聖徳太子が父親の用明天皇の祈願を実現して仏像を完成させた、

それが丁卯の年（607）だというのである。この607年が法隆寺の前身である斑鳩寺の創建された年だということになる。

娯楽要素の勝った作品であるとはいえ、近松門左衛門が『用明天皇職人鑑』においてこの天皇とかかわって、宗教戦争について真っ向から取り組み、職人身分についても切り込んだ歴史認識はなかなか鋭利なものがあるように思われる。われわれは日本で（世界で）一番古い会社として578年に創始されたという金剛組という宮大工の組織が存在しているのを知っている。

### 【京太郎とチョンダラー】

御伽草子の『京太郎物語』も、『烏帽子折』の挿話に似た話である。『室町時代物語大成 四』（角川書店 昭和51年）によって概要を示すことにする。

用明天皇がまだ即位以前の東宮であったとき、筑紫からやって来た男たちが宮廷で掃除の役を務めながら、みやこで多くの后妃采女を見たが、太宰大貳の娘のおと妃ごぜん以上に美しい女性はいないと話しているのを聞いてしまう。東宮はまだ見ぬ恋に沈み、想いに堪えかねて、宮廷を抜け出して、九州に向かう。

代金をもたず船に乗り込むが、慣れぬ船旅で病んで寝込んでいると、船主たちに不当人であるとしてさいなまれようとした。そのとき、和歌を詠むと、さいなもうとした男たちの手はすくみ、倒れ伏した。

九州について、あたりの貧しい家に、京太郎と名乗って住まわせてもらった。京太郎は笛の名人で、夜もすがら心を澄ませて吹くと、その笛の音におと妃ごぜんもあくがれて、琴の音を掻き合わせているうちに、いつしか二人は結ばれる。

都では東宮の失踪におどろいて、神々に祈り、宇佐宮で矢房馬（やぶさめ）を奉納することになった。人びとの注視の中、京太郎は見事な腕前を示すが、にわかに吹いた風に風が飛ばされ、龍顔をあらわにしてしまう。

東宮はおと妃ごぜんを連れて都に向かう。



ここでは絵の要素はない。だが、美しいという噂が伝わるのである。はるか遠い九州に住まう美人、色好みの東宮は「まだ見ぬ恋」に堪えかねて九州まで向かう。和歌と音楽を通じて恋を語り合って、二人は結ばれることになるが、この御伽草子の「京太郎」という名前から、思い出されるのは沖縄の芸能者のチャンダラー（京太良）ではないであろうか。伊波普猷の『琉球戯曲辞典』を引いてみたい（『伊波普猷全集第八巻』所収）。

京太良Chondara 京太郎。万歳又はヤンザヤーとも云ふ。もと年の初に、寺と称する舞台小屋を背負って、首里那覇の名門の家に至り、腰鼓を撃ち、歌を謡つて、操り人形を舞はしたばかりでなく、毎月朔日と十五日には、貴賤の家々を訪れて、祝言を歌ひ、其の他新室のほがひや葬式の時の念仏をも唱へた。首里郊外のアンニヤと称する特殊部落の賤民で、彼等自身は、其の祖先が大和から漂泊して来たと語つてゐる。多分室町時代に、琉球と日本内地との交流が盛んであつた頃、九州辺から渡つて来た万歳の後裔でもあらう。それは彼等が謡つてゐる詞曲と『諸国童謡大全』に載つてゐる京太郎の詞曲とを一寸比較して見ただけでもうなづかれる。彼等の御知行の歌は、一名ウシテーの歌ともいつてゐるが、これを三河の国の升斗舞と比較して見ると、両者の間に著しい類似が見出される。又彼等の「鳥刺し舞」は、大部分琉球化してはゐるが、其の詞曲の名が長崎県の南高来郡の「鳥刺し」と同じものであるばかりでなく、その中のサイトリサーシといふ文句が、上総の長生郡のサイトリサシの一篇の名称及びその中の文句と符を合すやうなところがあるのを見ても知れる。今のところ、これらの傀儡子がどういふ経路を通つて、琉球へ渡つたかは判然しないが、詞曲などは、伝承していくうちに、音韻単語語法といふ順序で、漸次変化して、琉球的东西のものとなり、遂に今日吾々が見るやうな詞曲になつたといふ事だけはいへる。中には、全く琉球化した彼等の子孫が創作したと思はれるやうなものもある。「馬舞者」の如きは、その一例である。万歳敵討「此の二人や、京太良頭どやゆる。御慰みごとや

らば、御目覚ましがらめかに」「京の小太郎のつくたいんばい、尻解げ破れ手籠緒すげて」

京太郎（チョンダラー）というのは、京都からきた太郎なのであろうが、沖縄に京都から直接やって来たというのでもなく、それを名乗る集団が日本各地で活躍していて、沖縄には、伊波普猷がいうとおり、九州あたりから海を渡ってやって来たのであろう。中世の京都で盛んに行われていた祝福芸が日本全国に伝播し、沖縄にも渡って、伊波がいうように「琉球化」した部分もあったろうし、またヤマトでは消えてしまったものがそのままに保存された部分もあったろうと思われる。このチョンダラーの存在に始めて光を当てたのは宮良当壮であり、彼の『沖縄の人形芝居』（『宮良当壮全集12』第一書房 1980年）によると、彼がチョンダラーと呼ばれる人々の住むアンニヤ村を訪れたのは大正13年（1924）のことであつたらしい。アンニヤ村という地名について説明する中で、宮良は「一たび彼等が人形芝居を家業としながらも、念仏専唱の浄土宗を奉じて各地に転々流浪の生活をなし、而も今尚その部落の一角に阿弥陀堂を建て、崇信怠らざるを見れば、東の村の謂では無くして、或は行脚村といふ語からアンニヤ・ムラに転化したのではないかと思はざるをえない」と述べている。中世のヤマトの唱導芸にたずさわった人々の姿を彷彿とさせてくれる。沖縄は仏教化しなかったといわれるが、こうした形でヤマトのもっとも底辺を生きた人びとの宗教が入り込んでいたことになる。宮良はこのチョンダラーといわれる人びととみずからが伝えたヤマトから琉球にやって来た因縁話を記録して置いてくれた。

京都の街近くに一つの岩窟があつて、そこに貧乏な夫婦と、その間に生れた子供と三人で暮してゐた。夫はその妻が余りに美人なので、その側を離れて野良で仕事をするのを厭がってゐた。併しいつまでもかうしてゐては食にも困るので、丹念して漸く妻の絵姿を描き、そしてそれを畑で自分の仕事をする目の前に棒を立て、揚げそれを見ながら仕事をするようにしてゐた。か

うした日が幾日か続いた。所が或日突然旋風が襲つて来てその絵像を捲き騰げてしまった。夫の落胆は一方ではなかつた。

所で、その絵像は幸か不幸か、京のお城の庭中へ墜ちた。役人はそれを拾ひ取つて驚喜した。併しお咎を蒙つては大変だと直にお上へ差出した。お上ではこれを御覧になつて非常なる御機嫌、そして仰せられるのには、こんな絵があるからには天下何処にかういふ美人があるに相違ないと。それで早速家来共を四方へ走らせて京の内外を探さしめられた。所が却々見付からなかつた。時に例の岩窟の中では妻と子供とが食事をしてゐた。そこへ搜索人が踏み込んで来て、子供を残して妻女を浚って行つた。妻の絵像を失つて落胆しながら畑から戻つて来た夫は、その由を聞いて狂はんばかりに驚き且つ悲しんだ。併しお上の仰せとあつてはどうすることも出来なかつた。今まで命と頼んでゐた妻を奪ひ去られた夫は、せめてもう一度だけでも妻の顔を見たいと思ひ、日夜苦心して遂に人形芝居と万歳とを案出し、そしてこれの子供に仕込んだ。

愈々正月元日のあした、父子は京のお城へ乗り込んで目出度くその新案の芸当を演じて、轟くばかりの拍手と称賛とを浴びせられた。この時妻（今はお上の側女）は早くも自分の夫であることに気が付いてゐた。併し口に出す訳にも行かないので、角袋といふものを作り、その底の方に数多の小判を入れ、その上の方にお米を盛つて小判を隠してやつた。その時夫は美々しく着飾つた天女のやうに麗はしくなつた妻の姿を見てたゞ拝跪するばかりであつた。

その後父子は屢々お城へ行つた。その都度妻は角袋を作つて例のやうに小判を入れてやつた。幾度が重なる中に到頭発覚して、父子をこの地に置くことはお上の御為でないと、遂に島流しに処せられることになつた。その島が即ち沖縄島である。それ以来彼等はチョートウ・タラー（京都太郎）といはれて、人形芝居や万歳や念仏を唱へ、鉦叩きなどをして各地を廻り歩いた。

このチョンダラーの起源説話は、もちろん日本の多くの「絵姿女房」の一

つの変異型であるが、結局のところ、男がいかに芸能に精進しても女房と連れ添えなかった点がほかの本土の「絵姿女房」とは違って、いかにも哀れである。ヤマトの男たちは女房を取り返した上、貧しい身分からも脱却して殿さまの身分に取って代わったのであった。去年亡くなった私の大学時代の恩師である佐竹昭宏先生に『下剋上の思想』（筑摩書房）という本があるのだが、ヤマトでは下剋上を経験しているので、このような話が可能になるのかもしれない。あるいは、本土のヤマトンチュウの心性はあくまでものんびりとして苦労知らずなのかもしれない。説話は果報者の話でみちみちていて、「のさ」ばっていれば、果報は向うから飛び込んでくる。この世の不仕合せからはあえて目をそむけようとしたのかもしれないが、沖縄ではそうもいかなかったであろう。沖縄のチョンダラーの起源説話はあくまでもヤマトの「絵姿女房」から変異したものであろうが、イズーをマルク王に返し、コルヌアイユを追放同然になって各地を転々として、トリスタンがついにはブルターニュに身を落ちつけるのと軌を一にする。チョンダラーは女房を京都においたまま、琉球に身を落ちつけたことになる。イズーは瀕死のトリスタンのもとに海を渡って駆け付けようとするが、ヤマトの女房は琉球まで行こうとはせずに見捨ててしまう。

（この稿続く）

〔この論文は共同研究プロジェクト「日本文化研究の新しい地平」によるものである〕

# The Cycle of “Tristan and Iseult” in Japan (II)

Hideyuki UMEYAMA

In *Kojiki* we can also find another version of “Tristan and Iseult”. Kaminaga-hime (Princess Long Hair) of Hyuga province was sent to Yamato to marry Emperor Ojin. Nintoku, son of the emperor, falls in love with her because of her enormous beauty and became sick at impossibility of his love. Ojin, acquainted with the agony of his son, decides to concede his beautiful fiancée to him. This relation of three persons (Kaminaga-hime, Nintoku, and Ojin) recalls the triangular relation of Iseult, Tristan, and Mark.

The folklore tales of “Esugata-nyobo (The Portrait of the Beauty)” which succeed those of Kaminaga-hime, are found from north to south in Japan. In those tales a portrait enchants a lord instead of hairs. Looking by accident at a portrait of a beauty, a lord commands his retainers to fetch and carry her to his castle. Her husband, surprised at the sudden disappearance of his beloved, comes to the castle where she is living melancholically with the lord. Then, her husband, profiting by his excellent musical skill, succeeds in exiling the lord and regains his wife. It is needless to say that Tristan is an expert at the lute and the violin.

The Chondara theater still remains in Okinawa. It is said that Chondara is the name of the musician who came from Kyoto and brought Japanese traditional music to Okinawa. Chondara had a very beautiful wife,

whose portrait was blown by the wind and was gained by the Emperor. Emperor wanted her and ordered his men to abduct her in order to satisfy his desire. In his deep desperation, Chondara came to the castle and performed music well in the presence of his beloved and the abductor. Chondara did not succeed to regain her, but being awarded the fief of Okinawa, had to live alone as a musician there.

Tristan, of course, at last lived in Bretagne, crossing over the sea, far away from Iseult.